

子どもに必要な栄養素

—子どもたちの成長の原因を探る—



【学校図書支援】「通信 No.14」でボランティアの呼びかけをいたしました、地元業者の山十さんの業務である学校図書の台帳入力・学校搬入作業の支援を行いました。土曜日の朝、モビリアのセンターハウスに、山十さんから小中学校 15 校の購入学校図書およそ 1,500 冊が運び込まれました。出版社の目録と注文データ、現物の本を見ながら、納入する図書のデータを一冊一冊入力していきます。学校で使われている本は、こんな風に登録されて搬入されているのかと、普段は知りうるののない裏方を垣間見ることとなりました。ボランティアのみなさんのおかげで、2 日半で作業が終了しました。

19 日（火）は 4 名が残り、2 グループに分かれて市内 15 校への搬入作業を行いました。顔見知りの小友小中学校、広田小中学校だけでなく、これまで訪問することのなかった学校にも顔を出しました。校舎が全壊して長部小学校で学校再開している気仙小学校の副校長先生は、既に Ed.ベンチャーの名前を知っておられて、夏休み中の学習支援に必要な机や椅子の提供の相談がありました。また、「どんな団体でどんなことをしているのか」という質問を受けることもありました。学校ごと被災状況も違い、この 4 ヶ月間で行ってきたことにも違いがあることをあらためて知る機会になりました。

小友小中学校を訪問した際は、ちょうどお昼休みの小学生が玄関先にいました。モビリアの子ども支援は「すたんどばいみー」の活動になっていますから、小学生と私たち大人が顔を合わせるはずいぶん久しぶりなのですが、「あ〜！」と声をあげた小学 3 年生の男の子が近寄ってきます。思わず両手を少しあげて手を振ると、その両手にすっかり自分の手をからませてきました。その時、4 月にモビリア避難所に張った私たちのテントに入り込んで甘えていた子ども達の姿が思い出され、震災後のあの時あの場所で、この子ども達と出会ったことは、計り知れずに重たく大きいことであると感じると同時に、大人としての責任をあらためて感じたりもしました。

今回の学校図書支援では、中学生に 1 冊ずつ本をプレゼントする企画も盛り込みました。陸前高田市内には、都市部のように、本屋さんに出かけて行って、子どもたちがたくさん本の中から、好きなときに好きな本を購入できるという環境はありません。ですから、夏休み前になると、学校業者を通して、本のカタログが届き、その中から好きな本を注文してお金を払うという仕組みがあります。しかし、今年は保護者の経済的負担を考えて、山十さんはこの注文を控えていたそうです。そんなお話をお聞きし、今年も子ども達に本を届けたいと考えまして、例年通り中学生に 1 人一冊の本の注文をもらい、その本代を Ed.ベンチャーの震災支援から支払うこととしました。注文書には、写真のような紙を貼りました。



【子どもの成長】万石浦の子どもたちの成長を見ていて、目を丸くして驚くことが多くなりました。そうしたとき、「子どもたちのこの成長の原因は何だろう」とつい考えてみたくなります。今回の支援を振り返りながら、この謎に迫ってみました。

☆話し合い

土曜日は、みんなで修学旅行のお小遣いやお菓子の金額、持ち物などの話し合いをしました。以前だったら、イスに座って人の話さえ聞くことのなかった子どもたちが、司会と書記のもと、黒板を見ながら話し合いました。もちろん、発言者の声が聞こえなくなるくらいに騒がしいときもありますが、それでも 1 時間ほどの会議をこなしました。思いついたことをただ手をあげて叫んでいるだけのようにも見えますし、全く関係ないことを、「おじさん、おじさん」と大人に向かって話し出す子どももいます。でも、今までと明らかに変わっていたのは、「会議自体を楽しんでいた」のではないかということです。みんなで集まって、自分を主張したり、他の子どもとやりとりすることが楽しかったのではないかということです。偶然居合わせた避難所での子どもたち。その子どもたちをつなぐものはありません。やがては出て行く仮の住まいとしての避難所ですから、相当意図した大人側からの働きかけがないかぎり、集団が形成されることはありません。集団が形成されないということは、自分を主張し、自分自身の立ち位置を子ども同士の中で確認することはできません。避難所で、多くの大人に囲まれている子どもたちは、結局は「子ども扱い」の中で自分自身を感じとる場が失われていたのかもしれない。それが、修学旅行をきっかけとして、目の前に修学旅行を迎えるタイミングで、やっと「合法的に」騒ぎ、そして人と触れあう機会を得たのではないのでしょうか。この「話し合い」は、日曜日の「炊き出しのお手伝い」の場面でも見られました。数週間子どもの様子を見ていなかった支援者が、話し合いの様子をかいてみて、大きな声で叫んでいました、「信じられない！」。

☆みんなで遊ぶことと言葉遣い

話し合いができるようになるのと同時に、子どもたちの遊び方も変わっていきました。それまでは、大人をひとり「つかまえて」、自分の遊びにつきあわせるのがいつものやり方。ちょっとでもつまらないことがあると、ふてくされて、大人に向かって「パーカ！死ね！」と捨て台詞を吐いて去っていく。どの子どもそんなことを繰り返すのが常でした。しかしこの頃は、子ども同士で遊ぶようになりました。ドッジボールはもちろん集団遊びですが、ちょっとしたキャッチボールをやっているところに入って、バッターボックスに立ってバッティングするなど、お互いがからみながら遊びます。

こうなると不思議なのは、遊びのメリハリもついてきて、大学生が準備してくれた「団



扇づくり」などに集中して取り組むこともします。また、言葉遣いさえ変わるので。つい先日まで常に大人を呼び捨てにしていた子どもが、大学生に向かって、「甘利さん、一緒に行つてよ」と「さん付け」したときには、呼ばれた本人もびっくり。加えて、「ハイ」という返事も今回の支援で初めて聞いてしまいました。オセロが一気に裏返っていくように、集団性を取り戻した子どもたちは、このタイミングで連鎖的な成長を遂げているようです。

☆お祭りと責任感

日曜日は、私たちの支援の仲間でもある黒木さんのグループが、炊き出しをやるというので、そのお手伝いを子どもたちがしました。内容はかき氷やフランクフルト、綿菓子に流しそうめんといったお祭りムードのもの。炊き出し隊到着が少し遅れていると、「まだこないの」と何度も聞いてきます。分担の話し合いもスムーズに、避難所や仮設住宅へのビラ配りに、みんなで仲良く出かけていきました。一軒一軒、一人ひとりに声をかけて戻ってきたときには汗だくで、どの子どもも真っ赤な顔をしていました。ビラを配りに行った先で、ずいぶんとよろこんでもらえたみたいで、アイスクリームをいただいたりもしたそうです。

そして、いざ炊き出しが始まると、大人顔負けに自分の持ち場分担をしっかりとしきります。「しばらくやったら、飽きて職場放棄かな？」という予想を裏切り、どの子どもも生き生きと自分の責任を果たします。かき氷を削り、熱い綿菓子の機械をまわし、焼けたフランクフルトをお皿に持って、お客さんに声をかけながら渡していきます。別に大人に教わったわけではないのに、自分たちで考え、自然に行動している姿は、自信とプライドにあふれていました。一人ひとりの子どもに対するイメージが、大きく変わっていきました。「なんだ、やっぱりできるじゃないか。人一倍、立派に行動できるじゃないか。きっと、震災以後、責任ある仕事をやらせてもらってこなかったんだ…」。そんな思いで胸がいっぱいになりました。

子どもは自分の足元を、自分だけの力で踏み固めることはできません。でも、大人の少しの助けがあれば、または、少しのきっかけを与えてくれるならば、大きく成長していくようです。知識（陸前高田での図書への取り組み）・集団・自己主張・物事を任されること…子どもたちが成長するために必要な栄養素が、少しわかったような気がした今回の支援でした。

帰りがけには、自分が書いた修学旅行の「しおり」を誰もがさがしていました。（実は、先に帰った理科大生が、子ども達がなくすことを心配して預かって持っていたのですが…）。そんな姿、先週末では見られませんでした。今までほったらかしでも平気だったのに、「来週忘れないでね！」と言われたときには、正直その現金さに吹き出しそうになりました。

「明日は休みなのに、何でこないの？来てよ」。万石浦の支援も一区切りを迎えそうになっている今、この言葉に私たちは後ろ髪を引かれる思いです。



【次回の支援の予定】7月20日現在

■7月22日（金）～7月24日（日）の第17回支援

金曜日午後：小友・広田中の支援物資運搬

土曜日終日：モビリア仮設住宅の子ども学習支援（すたんどばいみー）

終日：小友中学校理科室整備支援

午後：万石浦中学校避難所子ども支援

日曜日午前：モビリア仮設住宅の子ども学習支援（すたんどばいみー）

終日：万石浦中学避難所子ども支援

【お願い】日本財団の助成金（第2期）の応募に落ちたため、万石浦避難所の子ども支援の修学旅行に関わる費用が不足する見通しになっております。ご支援いただけますと大変助かります。

【協力に感謝!!】

■今回の支援隊のメンバー（21人） 柿本隆夫（引地台中学校）、家上幸子（Ed.ベンチャー事務局長）、清水睦美（東京理科大学）、荻谷夏子（松永雅文（大和市特別支援教室）、グイキムチャイ（会社員）、村田仁美（和光大学））、笹本雪子（引地台中学校）、日比和子（光丘中学校）、櫻井千夏（歯科衛生士）、藤田瑞穂（引地台中学校）、増山博丈（大和市生活環境保全課）
すたんどばいみー：宮脇英理・劉麗鳳・馬場有希（西鶴間小学校）
理科大G：今井美里・大林沙紀・甘利悠貴・佐藤岳也・谷口友梨（東京理科大学生）、山本遼（東京大学院生）

- 活動内容 ①小友中学校 物資の提供：マウスピース（支援）、小ぼうき（購入）
②広田小学校 物資の提供：レターケース（支援）、学校使用消耗品（山十経由）
③気仙中学校 物資の提供：学校使用消耗品（山十経由）
④モビリア仮設住宅 物資の提供：センターハウス使用消耗品（山十経由）
すたんどばいみーによる子ども支援（土・日）
⑤学校業者支援：山十（担当 金野さん）の学校図書データ入力・搬入支援
⑥万石浦中学校避難所 子ども支援（土・日）

■ご協力いただいたみなさま（敬称略、順不同、物資・寄付を含む）7/8～7/15

手塚文雄、石川和友（大和市国際化協会）、堀健志（東京理科大学）、有本真紀（立教大学）、佐々木亮（東京理科大学）、倉島千恵

今後の継続的な支援の活動のために広く寄付を募っております。

横浜銀行 中央林間支店 普通6018180

Ed.ベンチャー東日本大震災支援（Edベンチャーヒガシニホンダイシンサイエン）

NPO法人教育支援グループ Ed.ベンチャー

〒242-0007 大和中央林間 3-16-12-107

Tel/Fax:046-272-8980 e-mail: toiwase@edventure.jp

